おかげさま

別冊

真宗大谷派
高德寺通信
2019年 報恩講 法話

高德寺 報恩講

法話スペシャル

2019.10.19

『誰にとっても大切な教え』

～阿弥陀の光に照らされて歩む道～

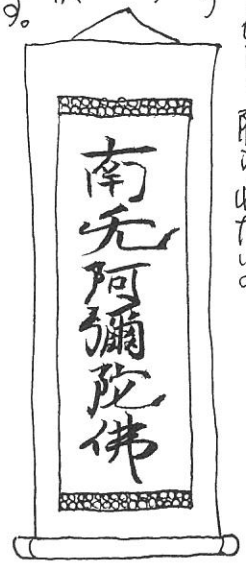
海法龍（かいほうりゅう）先生

横須賀

長願寺（ちょうがんじ）住職

こんにちは。ご紹介いただきました海法龍と申します。毎年、高徳寺様の報恩講にご縁をいただいて来ております。こちらのご住職とは、私の方が少しだけ年上なんですけど友達という仲間としてですね、ずっとおつき合いさせていただいていることであります。ですから今回のテーマも実は、ご住職のテーマなんですね。どんなお話を…といつもご相談があるんですが「新井住職の思いの中で何かありますか？」と聞くと、いつもご自分の方から仰ってくださるんですね。この『誰にとっても大切な教え』～阿弥陀の光に照らされて歩む道～と、そういうテーマをですね、あの私が出したのではなくて私がいただいたんですね。ですからこのいただいたテーマを私も皆さんと一緒にですね、あらためていただいて、そのお心を皆さんと一緒に尋ねていきたいと思いながら今日は来させていただきました。ご存知のように今日は報恩講ですね。報恩講というのは〝親鸞聖人のご法事を勤める〟それが私たち浄土真宗のお寺の一番中心になる行事である訳です。それを報恩講と言うんですね。親鸞聖人は90年のご生涯だった訳です。その当時で言えば（1173年～1262年）非常に長命ですね。そして90年のご生涯を閉じられて死んでいかれた訳ですね。要するに〝亡くなった〟ということ。「死」ということです。死ということを通してあらためて親鸞聖人が出遇った〝南無阿弥陀仏〟の教えのこころ、そのおこころを、死ということを通しながらいただいていこう、尋ねていこう。そういう行事として始まったのが報恩講です。仏教というのは、死ということ、亡くなっていくことをくぐっていくんですね。お寺というと、どうしても〝死〟というイメージがあり、暗く感じるんですが、死という事実は本当は暗いことではないんですよね。生まれたら必ず死んでいく訳ですから。それを仏教では何と言うかというと〝事実〟と言います。生まれたことも事実ですね。亡くなっていくことも私たちの事実ですね…。誰にとってもいのちは、生まれて死んでいくいのちを生きているということですよね。生まれて死んでいくいのちです。そのいのちをどういう風に生きているのかということですよね。そこに大きな課題がある訳ですね。そして生きていく中でやはり遇わなきゃならないことが何かというと、やっぱり…死ということに遇っていかなきゃならない訳ですね。ですから親鸞聖人が

亡くなっていかれたってことも、当時親鸞聖人にご縁をいただいた方ですね、そして親鸞聖人のご遺族の方々ですね、そういう方々があらためて死ということに触れて、親鸞聖人が出遇った仏教とはどういうことだったのかということが、ものすごく深く深く感じられてくるんですね。だから死に触れるということは、私たちに"深さ"を与えてくれるんですね。生きているというまなざしで見るならば、どこまで行っても思い通りというところから抜けられない訳ですね。生きるということを生きるという視点で見る限り、どうしても浅くなる訳です。生きることを死ということをくぐっていくのならば、限られているいのちなんだなっていうことを、私たちはあらためて知らされていくでしょうね。あらためて知らされていくということは、同時に限られたいのちですから、限られたいのちをどう生きて来たのか。どう生きて行くのかっていうことですよね。そういう…この事実が私たちに何を与えてくるのかということ…問いを与えるんです。死していかに生きて行くのかというところにですねぇ親鸞聖人が出遇った"南無阿弥陀仏"のおこころがある訳です。その南無阿弥陀仏の意味がお釈迦さまの教えの意味がある訳です。そういう形で亡くなっていくということは、先程言ったように誰にとってもあるんですよ。亡くなっていくいのちをどう生きて行くのかという教えです。だから誰にとっても大切な教えなんですね。亡くならない人はいない訳ですから、平等なんですね。誰にとっても大切な教えとして、平等に私たちに呼びかけられ、私たちに与えられる。こういうふうに言っていいかもしれませんね。そこに阿弥陀の光に照らされて…そういう表現がありますが、これは南無阿弥陀仏のことです。南無阿弥陀仏が私たちに示している世界が、南無阿弥陀仏のお言葉の中に大切なおこころが…つまり意味があるんですね。ですから意味の世界なんです。今日のお内陣(ないじん)のお荘厳(しょうごん)、すごく綺麗ですね。報恩講ですから特別です。非常に美しい形で型取られています。これは教えを表わしているんです。南無阿弥陀仏を表わしています。お経に書かれていることがらを形で表現した。だからどこかにある世界ではないんですね。お経のお言葉のこころを形で表現した訳です。ということは、お経のお言葉のこころを私たちに伝えるために形にしてある訳ですね。そして私た



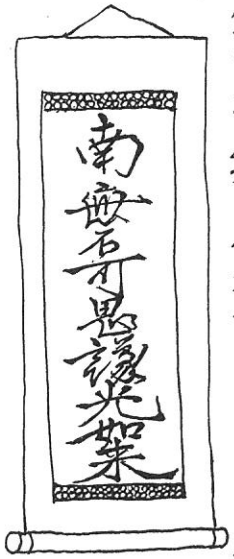
ちに教えを与えていくという意味を持つ訳ですよね。私たちはそれを与えられている訳です。触れさせていただいているんです。そこにね、大事なことを私たちは感じ取っているし、知らされていくという意味を持つ訳なんです。私がお話している事はお経の中に書かれている事柄、おこころですね。それを私の言葉を通してお伝えしている訳です。だから、ご法話ということも根拠は何かというとやはり、お経のこころ。この形のお経のこころですね。まあ、言葉です。言葉が根拠です。そして言葉によって何を伝えたいのか？それは誰にとってもベースとなるもの。誰にとっても大切なもの：それを伝えようとしているんです。その誰にとっても大切なものに本当に触れていくにはね、やっぱりね順風満帆で幸せな人は分からないですよ。ピンとこないです。挫折をするとか、行き詰まるとか、悩むとか、苦しむとか…そういうことを経験して身に受けながら響いて来ます。私たちの悩み苦しみの象徴は何かというと、やはり「死」ということですね。べったりくっついているんですよ、生きることと。この死ということはね、これは人類の課題なんですね。いのちを受けたものの課題なんです。私たちが生きる中に死がべったりある訳です。それを感じながら生きるのは人間だけですね。どういうふうに感じながら生きているかというと

私たちは身を持っているということですから、身は生きているんだけど、じゃあ身で生きているかというとそうではないですね。身で生きているんだけど…どこで生きているかというと…〝こころ〟で生きているんですね。身で生きているならばですねぇ、生まれて死んでいくのが人生ですから。だから悩む必要はないし、恐れる必要もないですよね。事実だから。このお堂の中の半分は死なないで、半分は死んでいくということになるとちょっと話が違ってきますけども。事実はそうなんだけど、私たちのこころはね…違う言い方をすると〝思い〟ですね。思いです。思いはね、何でしょうか？亡くなった方に対して、どういう思いが出て来ますか？違う言い方をすれば老いた方を見たらどういう思いが出てくるのか？よくよく苦しんで来た人を見てどういう思いですか？病気で苦しんでる人の姿を見た時にどういう思いが出てくるのか？どうですかね？あー大変だなと、相手のことを思うということも勿論ありますね。そういうこころもあるけども、また、どうでしょう…亡くなった姿を見ればね、どこかに、あー死にたくないなっていう気持ちがないですかねぇ？こういう病気になりたくはないな…人には勿論言えませんよ。お見舞いに行ってね、「あーこういう病気にはなりたくないです」なんて言えないですよね。私、小さい頃にね、母親に連れられて、母親の友人のお見舞いに行った

ことがあるんですね。小学校前だったですかねえ。病室から出て歩いている時に母がね、「あーゆうふうにはなりたくなかねえ」と言ったんですね。九州弁で。「ああいう病氣にはなりたくはないね」…友達ですよ。だけどやっぱりそういう感情っていうのは起こってくる訳ですよね。あっ、そういうふうに思ってたんだなあと思いました。母は友人に心配そうにお見舞いの言葉をかけている訳ですよ。だけどこころではそーいうふうに思ってたんだなって分かって…。いろんなことを思うのが私たちですよね。立派なことも思うかもしれないけれど、やっぱり自分のことを中心にしか出来ない私たちがいる訳ですよ。やはり私たちは恐れる訳ですよ。死にたくないんですよ。恐れのこころがあるのが人間です。死は怖くありませんよって言ったらちょっとおかしいのではないですかねえ。まあ無理して言っているかね。やっぱりね、病氣になることも嫌だしね。こういうことを言ったら失礼なんだけど…老いていくのはどうでしょうかね？アンチエイジングなんて言葉もありますが、老いたくない訳ですよね。けれどもやっぱり年を重ねていくってことから逃げることは出来ないんですよねえ。老病死という事実の中を私たちは生きている訳ですけれどもそれに対して抗ったり、嫌悪したり拒否したりするようなこころも持ちながら生きているんです。だから誰にとっても通じる教えなんですね。

つまりそうやって事実を受け入れられないこころが私たちの中にあるということです。もっと言うならば、自分の都合の良い事実しか受け入れようとしないんです。自分の嫌だと思うことは拒否したい。受け入れたくないというこころですね。そういうこころを持って生きるのが人間なんだということですね。人はみんな"凡夫"ですと仰っしゃる。凡夫じゃない人はいないんですね。私も凡夫だし、こちらのご住職も凡夫だしね、親鸞聖人も凡夫だし、お釈迦さまも凡夫ね。トランプさんも凡夫ね。(笑)安倍さんも凡夫…みんな凡夫だということですね。ノーベル賞を受賞した博士も凡夫。能力が高いから凡夫じゃないということはないんです。社会的に地位が高いから凡夫じゃないなんてことはない訳ですよ。社会的地位が低いから凡夫じゃないってこともない訳ですよ。男性だから凡夫じゃないとか、女性だから凡夫じゃないってことでもない訳ですよ。どんな人も凡夫だって仰ってますね。一切が"凡夫人"だと仰ってる。じゃあその中味は何かと言うと、中味はここに2つ文字が入ります。皆さん"正信偈"ってご存知ですか？正信偈。親鸞聖人のお言葉ですね。親鸞聖人が南無阿弥陀仏のこころをいただいて、お釈迦さまのお覚りの中味をいただいて作られたものが正信偈という"うた"であります。私たちは必ずお勤めする訳です。今日も14時半からのお勤めは正信偈をお勤めしますね。最初の言葉は何でしたっけ？「帰命無量壽如来」

「南無不可思議光」…皆さんのお手元にありますかね？赤い勤行本をお持ちの方は12ページに出てくるんですよね。ここに2つの文字が入るんですが…「一切善悪凡夫人」「ぜんあく」と読みません。「ぜんまく」と言います。もう一度ご一緒に。「いっさいぜんまくぼんぶにん」…私たち、すべての人は凡夫。なぜ凡夫かと言うと、善悪という意識構造。善悪という価値観。善悪という思い。こころというのは善悪なんですね。それは自分にとって善いか悪いかということだからです。善いものは受容。受け入れることですね。で、嫌なものは…排除ですね。あの、非常に単純な言い方です。非常に単純な言い方だけれども、非常に根が深いということですねぇ。この観念から離れることが出来ない人たちのことですね。ちなみにこの一切善悪凡夫人という中の善悪というこころは、仏教の言葉で言えば「煩悩」と言います。煩悩です。ご一緒にどうぞ。「ぼんのう」…煩悩は無くならないね。無くなるとするならば、それは死んだ時。息が絶えるまで思いは巡りますね。だからそれを…無くならないから…「不断煩悩得涅槃」ご一緒にどうぞ。「ふだんぼんのうとくねはん」…煩悩は断つことは出来ない。消すことは？…出来ない。親鸞聖人は20年間比叡山で煩悩を消す、煩悩を断つ修行をされたんですね。だけどそれと決別して、比叡山を下りられたんですよね。そして法然上人と出遇っていかれた訳です。そこでナンマンダブツの教えに出遇われたんです。そういう人生がある訳です。煩悩を無くして悟りを開くんだっていうのが他の全ての仏教です。だから修行される訳です。煩悩を断つためにね。いろんな修行がありますね。精神統一。自分の気持ちがブレない。そういう心身を高めていくための修行をするのがいわゆる普通皆さんが知っている仏教。その仏教と決別したんです。それが親鸞聖人。修行する仏教はね、誰にとっても…の教えじゃないですよね。出家して修行が出来る人たちの仏教なんですよね。誰にとってもではない訳ですよ。一部の人だけの仏教です。普段の生活の中で仏教に触れていく道はどこにあるんだろう…？こういうことを先立って示してくださったのが法然さんだったんですね。法然上人ご自身もものすごく悩まれたんでしょうね。今まで修行してきたものを捨てることは出来ない訳ですよ。修行っていうのは分かり易いですよね？皆さんも一度、滝に打たれたら良いですよ。お遍路されたら良いですわ。どうなるかというと、なんか気持ちが、他の人と違うことをやってますから、高められたような気持ちになりますよね。その時は



そうかもしれないけど、生活に戻れば一緒ですよね。戻れば一緒なんですよ。修行することが善。修行出来ないことがダメ。というふうな見方がその当時にはありました。だからお坊さん達はとても傲慢になっていったんですね。時の権力に近づいて自分達が特権階級になっていったんですね。それを善しとした訳です。そういう姿に疑問を持った方々がいた訳です。それが法然上人とか親鸞聖人達です。それは本当の仏教ではないんじゃないの？と。人間の煩悩を断つと言いながら、煩悩のこころで生きてるんじゃないかと。煩悩を断つという気持ちもまた煩悩じゃないかと。そういうような思いがおありだったんじゃないかと思います。なかなかね、修行しても修行しても。ですよ、私たちから煩悩が消えることはない。その煩悩ということを、自分のいのちということから感ずるところは何かと言うとそれは「死」ということです。死にたくない、失いたくないということです。それが象徴的なことなんです。この本堂の余間に親鸞聖人の「御絵伝」があるんですね。あのお掛軸ね。親鸞聖人の誕生から亡くなるまでの90年を全部絵で描かれてあるんですよ。今、私が申し上げたことも、あの絵の中に描かれています。比叡山の修行のこともね。山を

下りたこともね。このお軸は下から見ていくんですけど…一幅に四幅分が(※)描かれていますので右下から見ていきます。得度…出家をされたところから始まります。で、上から2番目のところにね、こういう絵があります。遠くてよく見えないかもしれませんが、炎。これは何の炎でしょうか？親鸞聖人が90年生きて亡くなった後の炎。何の炎？亡くなったらどうするの？「火葬」そう、火葬です。親鸞聖人を火葬している絵です。燃えてるんですよ。ねえ、亡くなったら燃やすんです。こちらは亡くなった時の絵。ご遺体を輿に入れて運んでる姿。亡くなった姿。そして亡くなって火葬にして、最後はお墓。一番上の絵に描かれてます。このお墓が東本願寺の元。お墓からお寺になった。それが江戸時代のはじめに東本願寺、西本願寺に分かれていって、全国に親鸞聖人にご縁のあるお寺が生まれていったんです。当時、お墓から始まって、その後、お寺になっていくんですよね。親鸞聖人が亡くなられて、聖人の死ということを通して…親鸞聖人のお墓の所に皆が集ってお参りをして、聖人の人生に触れながら親鸞聖人はどういう人生を生きられたのか。南無阿弥陀仏はどういう教えなのか？自分達はその教えに出遇わせていただいた。ああ大事な教えだと。だから皆で親鸞聖人のご法事を勤めながら

※ 多くは4幅で一組。高徳寺にある御絵伝は1幅で(4幅分)一組

南無阿弥陀仏のおこころを確かめ合って人生を生きていこうよという形で生まれたのがお寺。真宗のお寺なんですね。死という事実を通してその教えを分かち合う。その教えでもって、この人生を生きる…ということですね。南無阿弥陀仏によって生かされていこうということが、残されていったんですね。親鸞聖人の90年のご生涯が与えたものですね。聖人のご生涯といっても南無阿弥陀仏に出遇われた親鸞聖人だから。つまり親鸞聖人を通して南無阿弥陀仏が与えられたんですね。そして南無阿弥陀仏を与えられた人たちが、あーこのこころで生きて行かなきゃならない…と確かめ合うのがこの報恩講です。親鸞聖人の90年のご生涯が私たちに残してくれたものは何かと言うと、報恩講ですね。報恩講でもって我々が教えに出遇っていくことが願われて、この場があるんだということを表している訳です。こうやって人が火葬されていく姿ですよねぇ。この絵のね、火葬されているという姿はね、ものすごく私は厳粛さを感じますね。亡くなった人の姿…遺体ですね。生きている時とは全然違う。雰囲気それから空気が。亡くなった時に私たちが感じるものがありますでしょ？思いはね、確かに死にたくないという思いが出て来ますよ。だけど、何かそこに死ということが私たちに与える、私たちの思いを超えて私たちに感じさせるものがありますよね。それは何かというと厳粛さですね。お墓…ね。真宗門徒はお墓に「南無阿弥陀仏」と刻みますから。やはり南無阿弥陀仏に触れていく場所なんですね。亡くなった方を通して自分も死んでいくのちだということ。そのいのちはどんないのちなのかっていうことを教えられる。そのいのちのこころを分からずに、自分のこころだけで生きている私たちが教えられる。そういうことが私たちに教えられてくる場所。厳粛さの中でその厳粛さをかき乱すようなこころを持ちながらも、私たちに大事な場をそこに開いてくださっている。それはね、死ということであり、死者であり、そして死者を通したその場の尊厳です。まあ、寺の住職をしていますから…私も横須賀のお寺のご縁をいただいて27年になります。やはり門徒さんと親しくなっていきますね。27年だから。親しくなっていくということは、別れは辛いんですね。長年、真宗の教えを通して、皆さんのようにこうしてお寺にお話しを聞きに来られて、普段からのつき合いもあって、そういう方々が亡くなっていかれるんですね。それはねぇ、ものすごくねぇ、重たい！。私、今日は、このお話しを終えたら、枕経に行くんですよ。昨日亡くなったんです。82歳の方。ベッドから落ちて。壁とベッドの間に狭まったんだね。で、娘さんにね、ラインで動けないと：助けてくれって連絡されたらしいんですね。娘さんがそのラインに気づいたのが夕方です。落ちたのは朝。で、気づいてから家に行ったら、ベッドの間で亡くなっていらしたらしいんだね。本当にこれはビックリですよ。この前その方と会ったばっかりだから。非常に残念。生きている時しか私は会えないんです。亡くなったお姿にこれから会うんですよね。そういう経験をしなき

やならない訳ですね。住職だからっていうこともそうだけども考えてみたら自分の父親も亡くなっているし、6年前には兄が癌で亡くなっているし…。やっぱりみんな出遇いがあると、必ず別れ…死んでいく訳ですよね。その度に、近ければ近い程、氣持ちが潰れていくような感じがしますね。そこに二つのことが私の中にある訳ですよ。何かと言うと一つは兄の癌で死んでいく姿を見てきましたから、父も癌で死んでいく姿を見ましたから…そうすると、何を思うかと言うと、思ってはならないことを思う訳ですよ。それは何かと言うと、自分もこういう病氣になっていくのかなと思う訳ですよ。そうすると、あーこんな形では嫌だなって思う訳ですよ。正直なところ。本音だね。っていうことと、もう一つは兄や父の死んで行く姿…それから8/1にいとこが亡くなりましたし、2年前の11/16、私のいとこの子どもが33歳で亡くなりましたし…やっぱりこう、亡くなった姿に触れるとねえ、その人の生きて来たという、誰かが代わってくれるようないのちではない訳ですから、その人その人固有のね…言えば、かけがえがない訳ですよね。そういう厳粛さ。それを感じますねえ。私たちに死ということが問いかけ、そして残しているものは…そのことを私たちの上に明らかにして伝えていくものとして親鸞聖人が出遇った仏教があったんですね。誰にとっても大切な教え。誰にとってもこのいのちというのは厳粛さがある。誰にとってもその厳粛なるいのちを私たちの思いで捉えてしまって、それを知りたくないだとか、どうだとかいうふうに思ってしまうような私がそこにいる。そういうことを知らされ、教えられていく。そういう教えとしてあるんだと。もう少し言うならば何なのかということがサブテーマでもある訳ですね。これも前に紹介しましたが、高村薫という作家の方がいらっしゃいますよね。阪神・淡路大震災を通して…ご自分も芦屋のお住いでしたから、被災されたんですね。親戚そして友人や地域の方も被災されたり、亡くなった方もおられたのでしょう。その中で高村さんは何て仰っているかというと、「死は私たちに思索を与える」と仰った。思索…考える。普段は生きることを生きるという上で考えている。儲かるか、儲からないか。善いか悪いか。損か得か。役に立つか、役に立たないか。そういう価値観ですよね。優れているか劣っているか。そういう善悪のところでしかものを観れない訳ですよ。だけど、死ということに触れていくならば、そんなものは間に合わないですよね？明日死ぬって言われて…。今日死ぬって言われて…。そこに生きているということが、存在しているということ。この私というのは、いったい何なんだろうか。という深い問いをいただくんです。死を通して、死が与えられると私たちの中に問いが残るんですよ。そう言って良いのでしょう。その問いの中で私たちは、自分の生き方やあり方を自分の存在そのものを、尋ねて来たんです。誕生だけでは尋ねられない。死ということを通さないと誕生の意味は分からない。誕生に意味はない。事実だから。生まれて来てるいのちを自分の都合の良いようにしか受けとめられないところに、私たちの生きていることの課題がある。そのために経典があるから。経典の言葉そのものに意味がある訳ですね。尋ねる